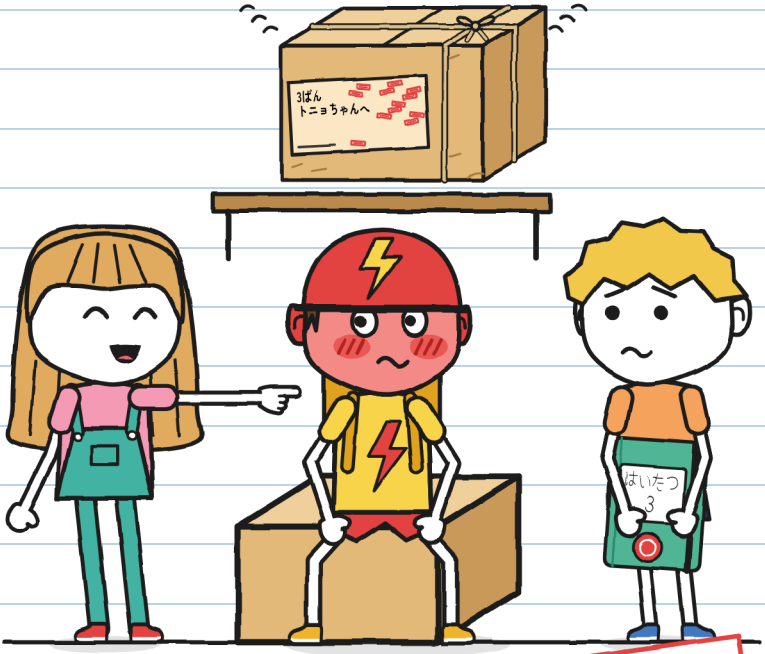
ありえない はいたつ・3

へんそう おねがい

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ S
初級・ワ+

ありえない はいたつ ・ 3
へんそう おねがい

文と絵：LinguAula

サイズ S ・ 初級 ・ 7+

日本語版：LinguAula

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

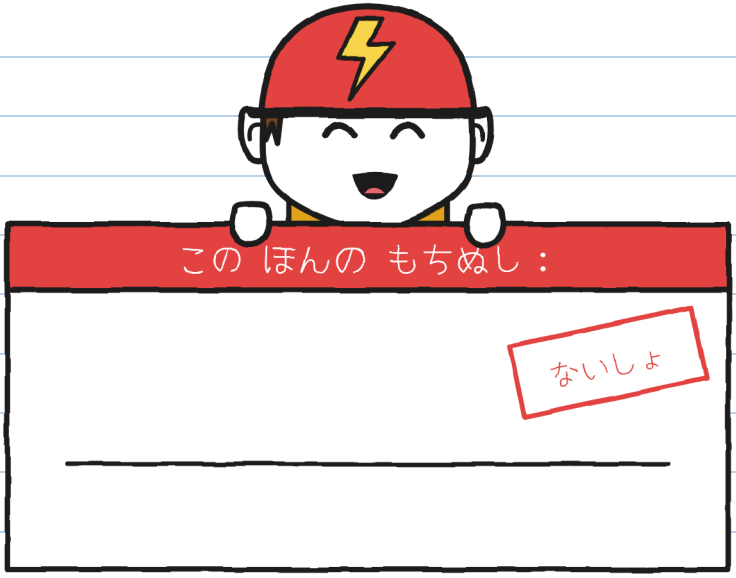
シリーズ第3作。前の2作：『このにもつは かみつく』

『かみなり前に あけるな』

LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この ほんを かいて いる あいだ、ケガを した
ひと
はいたつやさんは いない。あかく なった 人は いる。 —J.



そして さきに よむのは わたし。 —J.

みつけたら、もどして ください。おねがいします。

おはなしの なかだけ

この はんこは、おはなしの 中(なか)だけの こと。ほんものの にもつは とんで もどらない。ほんものの じてんしゃの ときは、76ページを まもって。 —J.

だれが だれ？



グニ。どようびの
はいたつやさん。だれも たのんで
いない ものを かく。この
ノートは グニの。



フリータ。みどりで かいて、
「J.」と サインする。いつも
たすけかたを しっている。それが
もんだい。

トニョ。じてんしゃで
イナズマびんの はいたつを
する。じっぷんで とどかなければ
タダ。あかく なるのは
ぶぶんごと。



マラさん。「ありえない
はいたつ」の てんしゅ。まじょの
ぼうしを かぶっている。いうより
ずっと おおくを しっている。



ゾーイ。イナズマびんの 人(ひと)。
いちばん はやい。あだなを
つける 人(ひと)。



ブルーノ。イナズマびんの 人(ひと)。
1かい パンクした。2ねん まえ。



3ばんの にもつ。うごかすと
なる。ラベルには なまえが
ひとつ だけ。

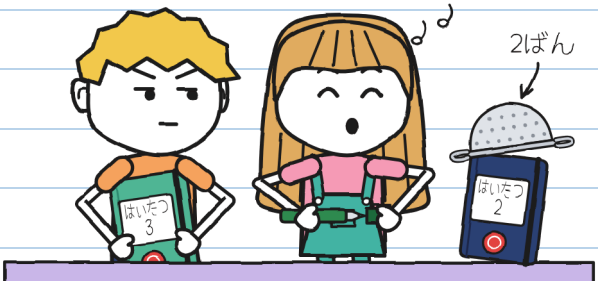


R.は、だれにも とどけられない
にもつを おくるひと。その
なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート3

ないしょ。

「ないしょ」は、先(さき)に 読(よ)む こと。だれにも 言(い)わない。 —J.



ノート2は ひとつの(みせ) あらしで おわった。これは みどりで、店の はんこも ある。ぼくが さきに つかう つもりだった。つかったのは フリータ。

たすける ために 先(さき)に つかった。どういたしまして。 —J.

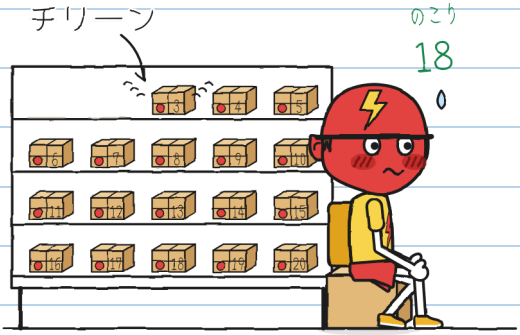
ぼくは たのんで ない。でも フリータには かんけい ない。

だい1章

チリーン

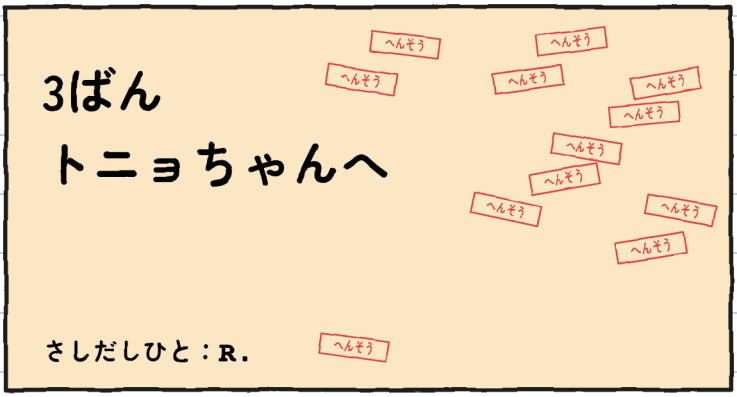
マラさんは、だれも とどけられなかった にもつを 店に
しまって いる。20こ あった。フリータと ぼくは、
たまごと たねを とどけた。のこりは 18こ。

あらしの 夜、ぼくたちは もう うちへ かえる
ところだった。にもつが ひとつ なった。
チリーン。



3ばんだった。イナズマびんの トニョは、
じっぷんで とどかなければ タダ。ヘルメットと 同じ
色に なった。

サインが なければ、へんそうの にもつは 夜明(よあ)けに
たなへ とんで もどる。サインして いいのは、にもつを
うけとる 人(ひと)だけ。ラベルに、きえない インクで。R.は
さしだし人(にん)。にもつを おくる 人(ひと)の こと。

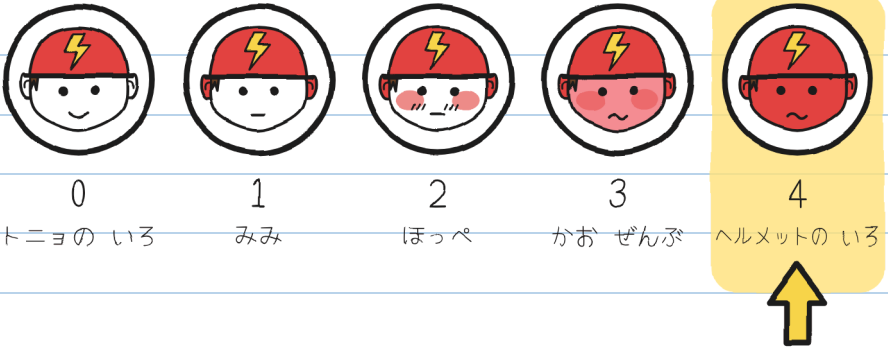


フリータは ラベルを よみはじめた：
「トニョちゃ……」
フリータは 口(くち)を とじた。フリータは ことばの
とちゅうで だまる ことは ない。ぼくは トニョを
見(み)た。あかく なって きて いた。

ことばを はんぶん よんだ。あとの
はんぶんは のみこんだ。 —J.

きゅうに まっかに なる 人も いる。トニョは ちがう。
ぶぶんごとに あかく なる。ぼくは メモした。

トニョの あかメーター



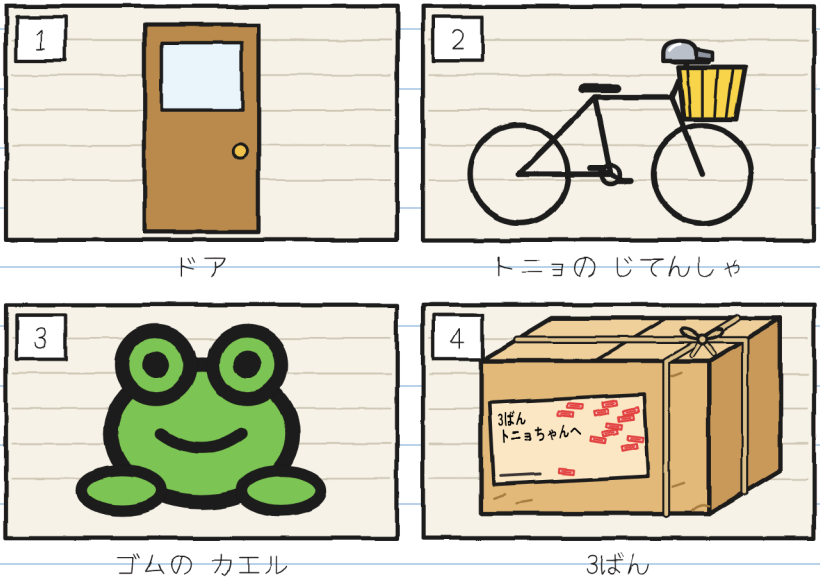
「その にもつは まてる」と トニョは 早口で いった。
「なんねんも まって いる。あと 一日。それとも
十日。イナズマびんは いそがない」
イナズマびんの 人が そんな ことを いうのは
はじめて だった。

その 夜：4。あかで かきたい。でも みどりしか ない。 —J.

「こんやは なにも あけない」と マラさんは いった。
「それに、たなには きょかなしで さわらない」
だれも さわらなかった。また チリーンが なった。
チリーン。
「いまの、ドアの おとだよ！」と フリータは いった。

わからない ことが あると、ぼくは リストを つくる。

チリーンの ようぎしゃ



ドア　トニョの じてんしゃ

ゴムの カエル　3ばん

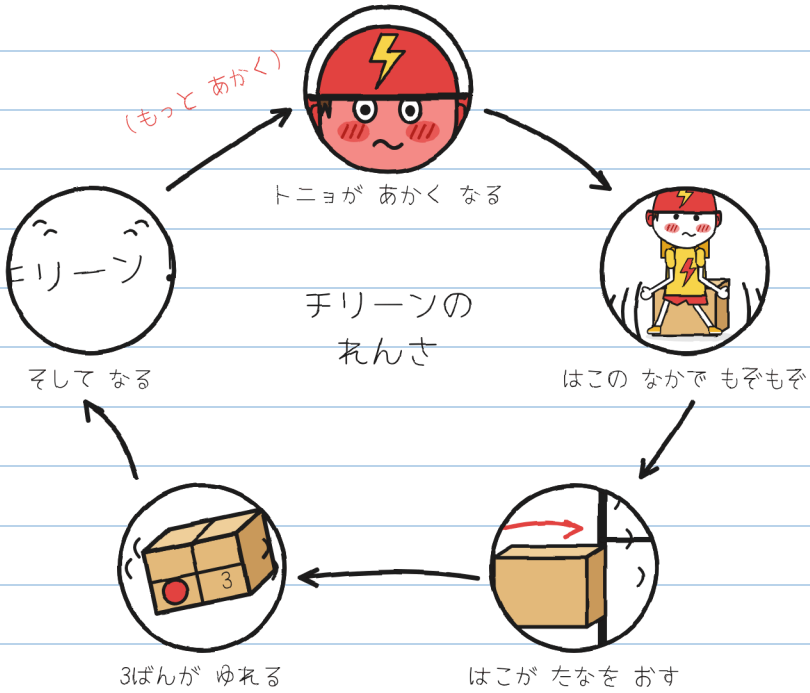
カエルは わるくない。わたし、しってる から。 —J.

ぼくは おとを ためしに 外(そと)へ 出(で)た。もう 雨(あめ)は ふって いない。
ドアを あけて しめた：ギィー。じてんしゃの ベルを ならした：リンリン！　カエルを おした：キュッ。



フリータは ゆびを ふって「ちがう」と いって いた。
どれも こんな おとじゃ ない。
ぼくは 中(なか)に はいった。トニョが はこに すわった まま もぞもぞ した。
チリーン。

ぼくは しゃがんだ。トニョの はこが、たなの 足(あし)に
くっついて いた。



まほうじゃ ない。トニョだった。
3ばんを うごかすと、なかで なにかが なる。

わたしと 同(おな)じ。 ーJ.

トニョは じっと して いる ことに きめた。

つづいたのは これだけ：

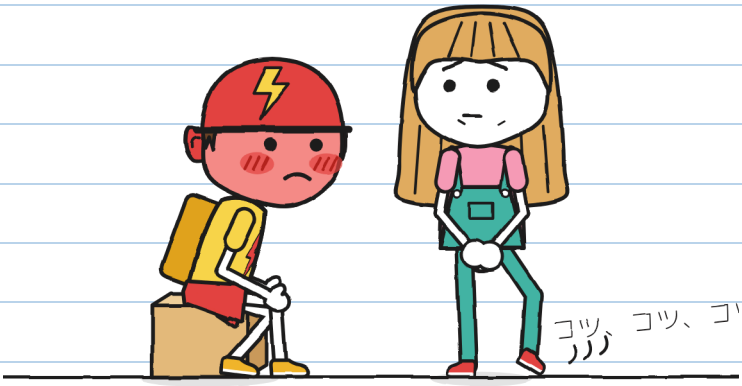


ただ きいただけ。きいただけで、たなは おせない。 —J.

この ひとことは おした。

「ぼくの ことだ」と トニョは スニーカーを 見ながら
いった。「ちいさい ころの」
とても ちいさな こえだった。カエルの ほうが
ぼくより よく きこえた はずだ。

フリータは 口を あけた。しつもんが たくさん
あった。トニョは まだ スニーカーを 見て いる。
フリータは トニョを 見て、口を とじた。

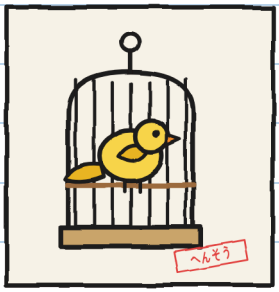


「もう きかない」と フリータは いった。
むずかしかった。足が ゆれて いた。

しなかった しつもんは 9こ。ぜんぶ メモして ある。 —J.

「どうして いちども とどけなかったの？」と ぼくは
マラさんに きいた。
「12かい もって いった。ラベルを 見(み)て ごらん。
みちも、ばんちも、みょうじも ない。トニョちゃんは
みつけた かぎり ぜんぶ ためした」

マラさんの トニョちゃんたち



1. カナリア。
（ラベルを ふんだ。ダメ。）



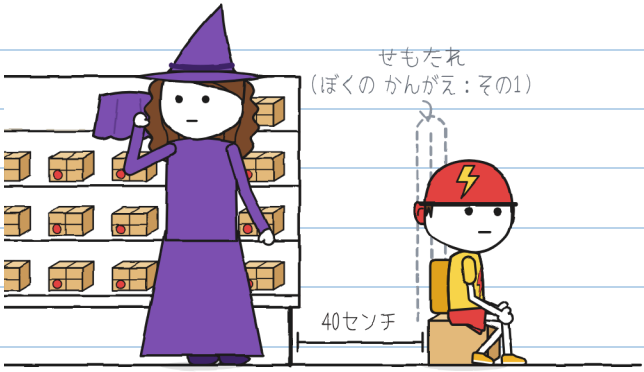
2. アントニオさん、71さい。
（「そうだと いいんだけどね」）



3. うんがの ボート。
（てが ない。）

「トニョは？」と フリータが きいた。
「この まえは まだ トニョを しらなかった」と
マラさんは トニョを 見(み)て いった。「ちいさい ころの
なまえは、だれも おしえて くれなかった」

マラさんは　カウンターの　下から　むらさきの
ぬのを　だして、3ばんに　かけた。ねる　ときの
オウムの　かごみたいに。トニョの　はこを　たなから
40センチ　はなした。
「これで　いい。もう　うごいても　いいよ」



トニョは　じてんしゃで　かえれた。ドアの　ところに
ある。10ぷんで　まちを　よこぎれる。
トニョは　また　すわった。
どうしてか　わからない。でも　かいて　おく。トニョの
はこには　せなかを　あずける　せもたれが　ない。ぼくが
かいて　あげた。

だれも　きみに　せもたれを　たのんで　ない。　—J.

店を しめる とき、トニョが さいごに のこって いた。
ヘルメットを とめて いた。
「マラさん。あした にもつの ことで はなしに くる。
ほかの 人に きかれない ところで」
「この ふたりは 店の 人だよ」
トニョは ぼくたちを 見た。
「この ふたりは いい。でも イナズマびんの
人は だめだ」



にもつは トニョあて だった。あとは トニョが
ほしいか どうか だ。

わたしは もう たすけかたを しってる。 —J.

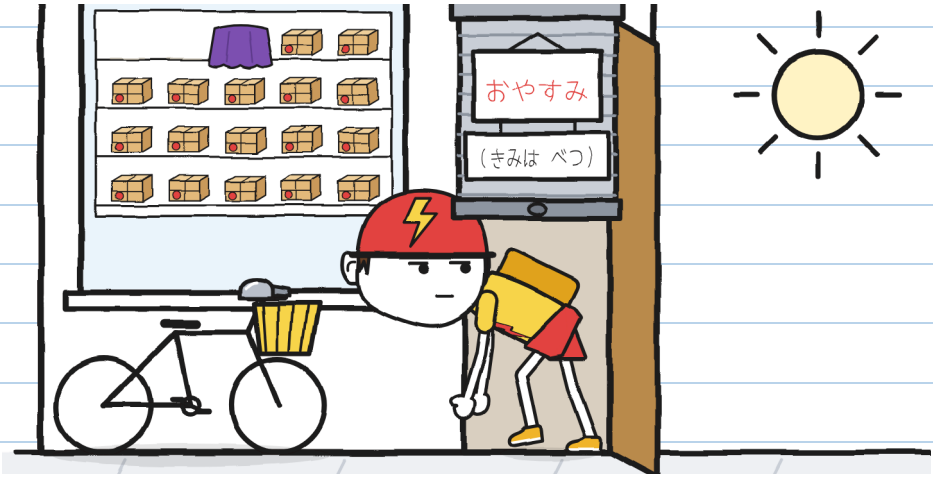
それが しんぱいなんだ。

だい2章

いいとは いって ない

日曜日は 店が おやすみ。マラさんは シャッターを はんぶん あげて おいた。はりがみを した：おやすみ（きみは べつ）。

トニョは 11じに きた。はいる まえに、道の りょうがわを 見た。みちを わたる ときみたいに。イナズマびんの 人は だれも こない。



わたしたちは 10じはんに きた。もしもの ために。 —J.

マラさんは 3ばんを カウンターに おいて、ぬのを
とった。はりがみを よむ ように いった：
「3ばんの にもつ。トニョちゃんあて。
あなたの こと？」
「ぼくの ことだった」
「それで いい。ほしい？」

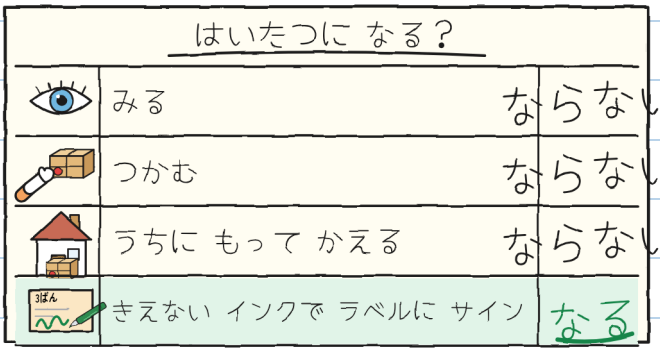
トニョは はこを 見(み)た。はこは なにも いわない。
「いいとは いってない」
「いやだとも いってない」
「ぼくは いった。『いいとは いってない』って」



サインしない ための ことば、3つ。かぞえた よ。 —J.

トニョは はこを、あつい なべを もつ ように
つかんだ。おもさを はかる。まわす。みみの そばに
もって いく。すこし ゆらす。
チリーン。
トニョは あわてて はなした。

「もし トニョが にもつを うちに もって
かえったら？」と フリータは いった。「トニョの
うちで ねれば、もう とどいた ことに なる。
りくつ だよ」
「へんそうの はんこは りくつじゃ きまらない」と
マラさんは いった。「インクで きまる」

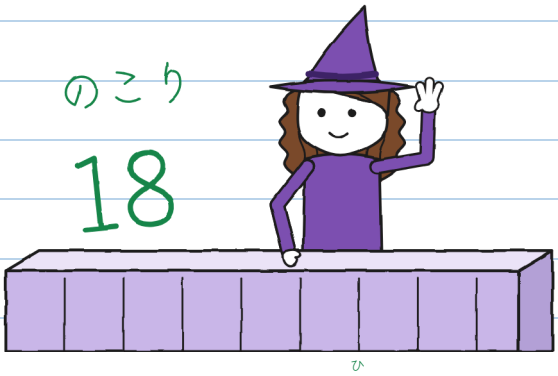


はんこと わたしは かんがえが ちがう。 —J.

「この はいたつは あなたたちの もの」と
マラさんは いった。「かみなりの ときと おなじ。
じょうけんは 三つ」
マラさんは ゆびで かぞえた：

1. はこは あけない。ラベルは はった まま。
2. 3ばんが みせから でるのは、トニョが たのんだ
   ときだけ。
3. うけとる 人が サイン。しなければ、よあけに
   もどり、なかった ことに。

「もし トニョが ずっと ほしがらなかったら？」と
フリータが きいた。
「じゃあ、ずっと そのまま」



「ずっと そのまま」は、とどける 日じゃ ない。 —J.

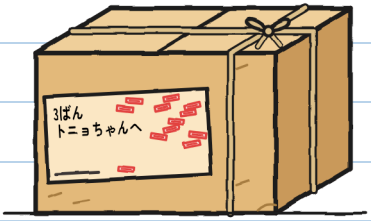
トニョは ながい あいだ だまって いた。フリータが じかんを はかった：4ふん。イナズマびんなら、はいたつ はんぶん ちかく。

「もって かえる」と トニョは いった。「とじた まま。かんがえる ために。いまのところは」
「あなたが たのむ のね？」と マラさんは きいた。
「ぼくが たのむ」

3ばんが どう でて いったか メモした。だれも うそと いえない ように：

もちだし カード

- [x] はこ：とじて いる
- [x] ラベル：はって ある
- [x] たのむ ひと：トニョ
- [ ] サイン：まだ



外(そと)で、トニョは 3ばんを じてんしゃの かごに いれた。
てを はなした。なった：チリーン。

ハンドルと、イナズマびんの ベルを 見(み)て いた。
なにかを おもいだした みたいだった。
「どうしたの？」と フリータが きいた。
「なんでも ない」
トニョは じてんしゃを おして あるいて いった。
トニョは ふだん ぜったいに あるかない。



「なんでもない」は「なにか ある」の
こと。たすけなきゃ。 —J.

ドアの ところから、かどに イナズマびんの
じてんしゃが ふたつ とまって いるのが 見えた。
「トニョ！ かごに なにが はいってるの？」
と おんなの 子が さけんだ。おさげが こしまで
とどいて いた。
「はいたつだ」
「だれあて？」
「おきゃくさん あて」

うそは ついて いない。こたえる まえに、はこを
まわした。ラベルが トニョの ほうを むいた。
イナズマびんの 人には 見えない。



「イナズマびんの 人は だめ」の いみが わかった。 —J.

その 夜(よる)、ぼくは へやの ブラインドを あげた まま に した。ぼくの 店(みせ) うちは 店の むかいに ある。3ばんが もどるか 見(み)たかった。

「グニ？」と お母(かあ)さんが ろうかから いった。「おきて なにして いるの？」

「にもつを みはって いるんだ」

「そう。でも パジャマを きて みはりなさい」

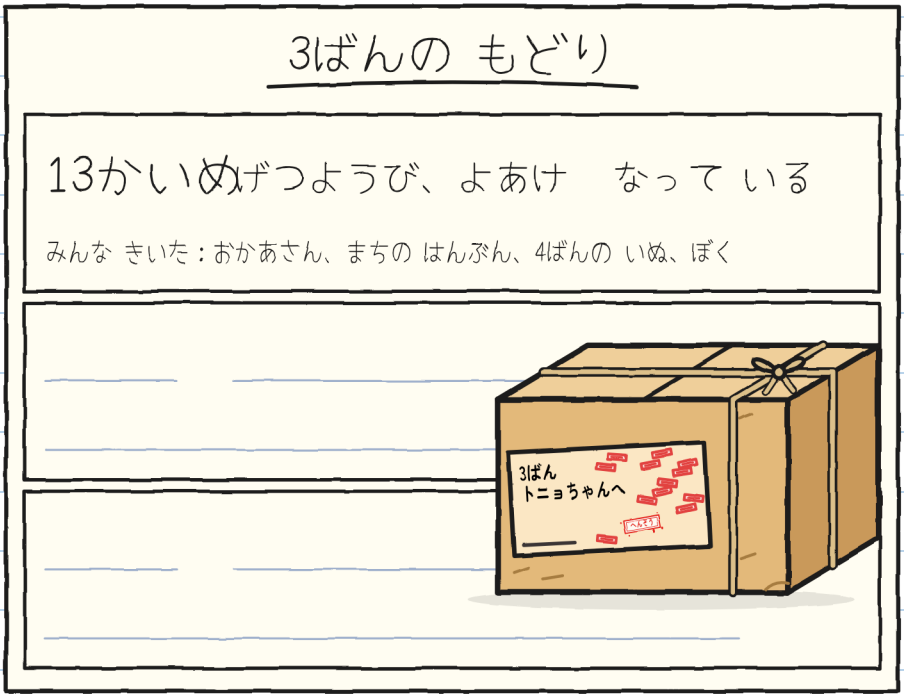


わたしも みはりたかった。わたしの まどは にわに むいて いる。 —J.

よあ
夜明けに 3ばんの おとが きこえた。
チリーン、チリーン、チリーン。
やがて やねの 上に すがたが 見えた。
ゆっくりと。アイスクリームの 車みたいな
おとだった。三つの まどに あかりが ついた。
いぬが ほえた。3ばんは、ドアの 上の ちいさな
まどから はいった。マラさんは その ために
あけて おく。



学校(がっこう)の あと、ぼくたちは 店(みせ)に いった。3ばんは たなの もとの ばしょに もどって いた。はんこが ひとつ ふえて いた：13。



「ばつじゃ ない」と マラさんは いった。「きまりだ。だれも サインして いない から、もどる」

はんこが 13こ。あと すこしで はこが 見(み)えなく なる。 —J.

トニョは 5じ20ぷんに、はいたつの あとで きた。
3ばんの ことは きかなかった。その あさ、3ばんが
うちの 上を とおる のを きいた から だ。

ぼくは 見て いない。トニョが はなして くれた：

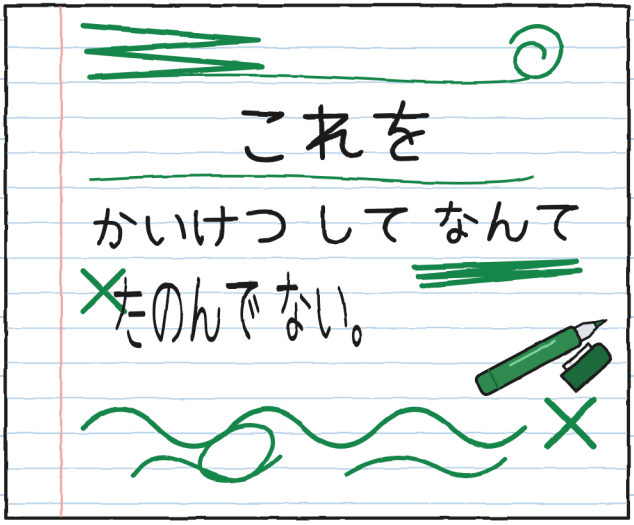
トニョが はなして くれた こと



「はこを ひとばんじゅう、げんかんの
マットに おいた」
「どうして 中に いれなかったの？」と
フリータが きいた。
「うちでは もう たくさんの 人が ぼくを
トニョちゃんと よぶ」

「サイン ひとつで ぜんぶ かいけつ」と、トニョが いった あとで フリータは いった。「ひとつ だけ。2びょうで できる。じぶんの サインで はかって みた」

ぼくは ノートを ひらいた。「みどりでも ぼくの ことばは かくせない」と おもった。ボールペンで ぎゅっと おして かいた：



よんだ よ。さんせい できない。いまのところ。 —J.

べつの かんがえが ある。そんな 目(め)で 見(み)ないで。 —J.

だい3章

サイン

火曜日、学校から 出ると、店の まえの 道に つくえが あった。きいろい テーブルクロスが ゆかまで たれて いた。フリータの 字の はりがみが あった。
まんなかには、なにかが かくれて いた。



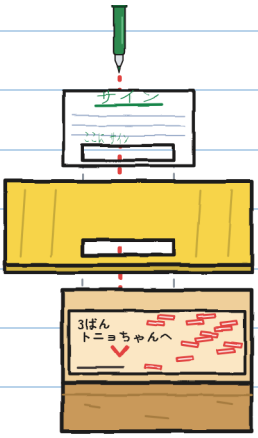
「サインだいだよ。サインを しやすく する だい」と フリータは いった。「わたしは サインを あつめて いるの。きねんの サイン」
「いつから？」
「きのうから」

サインだいの 上(うえ)に、せんの ある かみが あった。
下(した)に、はさみで きった ちいさな まどが ある。
テーブルクロスにも おなじ まどが、ちょうど その
下(した)に あった。
ぼくは テーブルクロスの すみを もちあげた。
サインだいは、ねかせた 3(み)ばんだった。まどから、
うえを むいた ラベルが 見えた。

しくみ

1. ちいさな まどの ある かみ。

2. あなの あいた テーブルクロス。



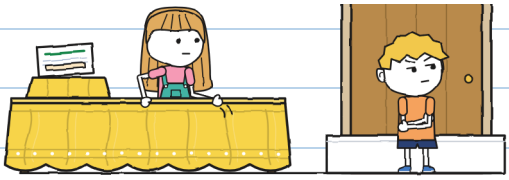
3. 3ばんの ラベルの、しろい ところ。

4. まどに サインした ひとは…… ラベルに サイン。

「わたしの ペンで」と フリータは うれしそうに
ひそひそ いった。「インクは きえ(み)ない。あした
3ばんは もどらない。トニョは 見て はじめて
しるの。サプライズ！」

「トニョは 3ばんを 店(みせ)から だして ほしいとは
たのんで いない。じょうけん 2だ」と ぼくは いった。
「あとで ありがたがるよ」
「マラさんは？」
「でんわ ちゅうだった。「サインの つくえ」って
いった。ほんとうに そうだし」
「サインだいは？」
「それは きかれなかった」

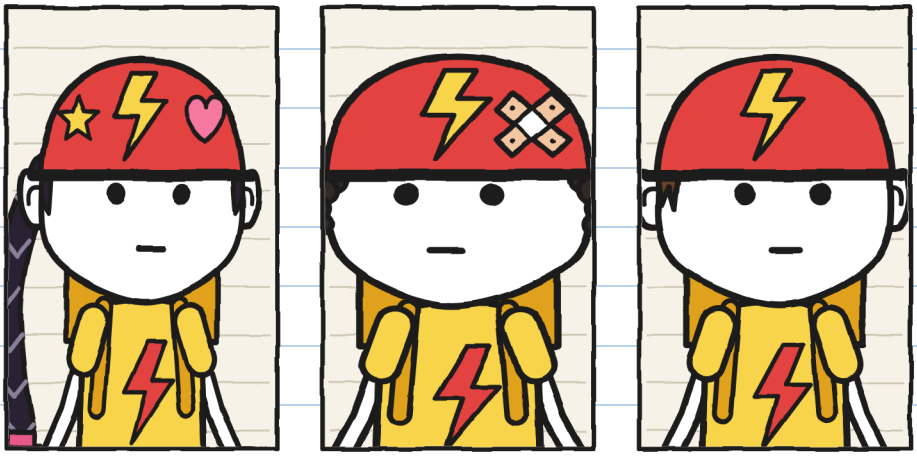
ぼくは フローラと 八(やっ)つめの たねの ことを
おもいださせた。フリータは フローラに はやすぎる
サインを させなかった。
「おなじじゃ ない。あの はいたつは まだ じゅんびが
できて いなかった。これは はやい やりかた だよ」
「じゃあ、きみが やれば。ぼくは しない」



いりぐちの だんに すわった。まじめな かおで。
ぜんぜん たすけない。 —J.

イナズマびんは、ぼくたちの みちを 5じ10ぷんに
とおる。三人、いちれつで。

イナズマびんの カード



ゾーイ、「ロケット」：
いちばん はやい。
あだなを つける。

ブルーノ、「パンク」：
1かい パンクした。
2ねん まえ。

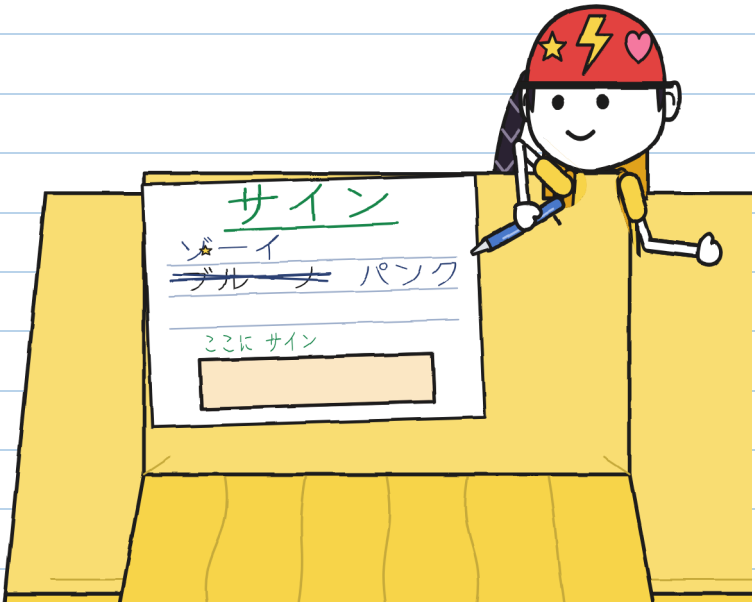
トニョ：
あだなは ない。
まだ。

「サイン？　わたしたちの？」と ゾーイは いった。
ブレーキを かけて、じてんしゃから おりた。

あの 人たちに サインを たのんだ 人は いない。だから
うまく いく。 —J.

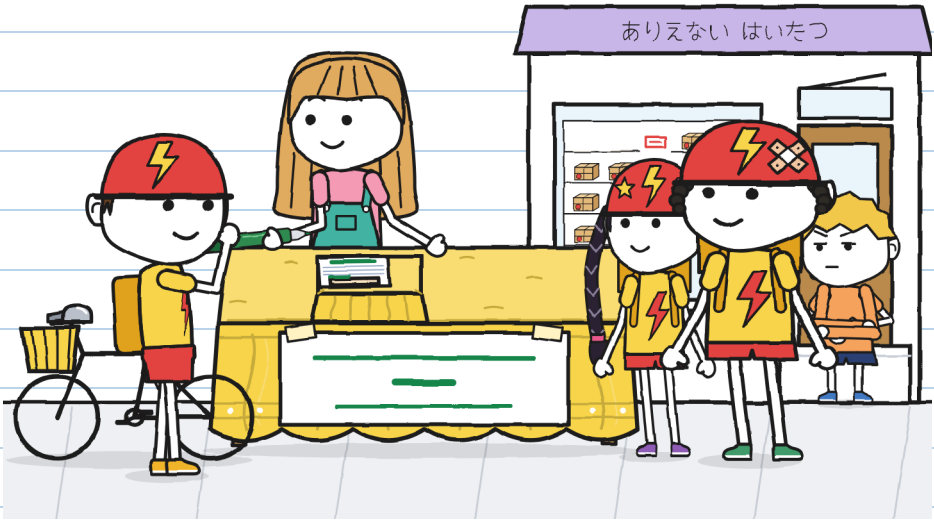
ゾーイが さいしょに サインした。なまえの まんなかに ほしを ひとつ つけて。ブルーノは「ブルーノ」と かいた。ゾーイは その なまえを けして「パンク」と かいた。

「イナズマびんでは あだなは とれないんだ」と ブルーノは おこらずに ぼくに いった。「いちど パンクしたからね」



トニョは まだ じてんしゃに のって いた。日曜日(にちようび)に 3ばんを 見(み)た ときの ように、つくえを 見(み)て いた。

「つぎは トニョの ばん」と フリータは いった。
「ここの 下(した)の、しるしの ところ。いちばん
いい ばしょ」
みどりの ペンを わたした。
トニョは はじめて サインを たのまれた。じてんしゃを
おりて、せすじを のばした。



だんから ぜんぶ 見(み)えた。「ぼくの こと じゃ ない」と
おもって いた。そして だまって いた。

ぼくは たちあがった。

「トニョ、ま……」

おそかった。トニョは サインだいを ぐいと
ひきよせた。サインを する つもりだ。
テーブルクロスの したで なにかが なった：

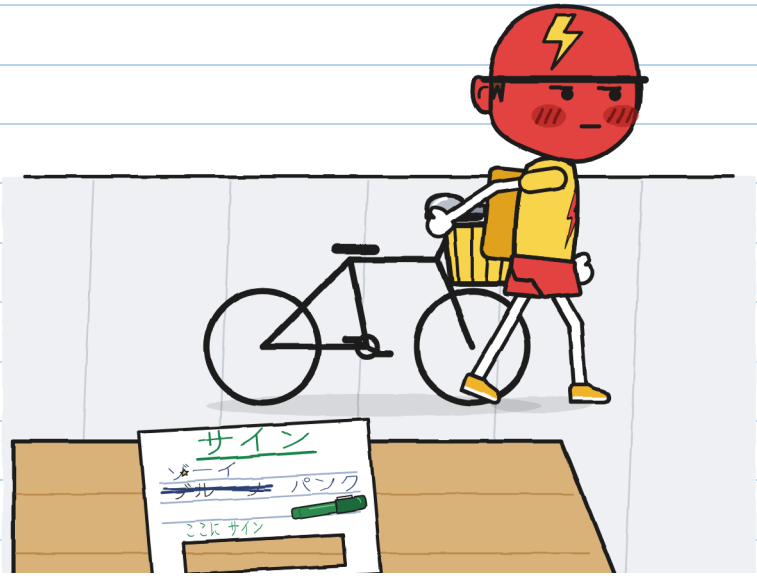


トニョは テーブルクロスを もちあげた。



「ト・ニョ・ちゃ・ん・へ」と ゾーイは ゆっくり、
うれしそうに よんだ。
「トニョちゃん？」と ブルーノは いって、わらった。
ゾーイは わらわなかった。ゾーイは かんがえて いた。

トニョは どなら(うえ)なかった。ゆっくり ペンに キャップを して、かみの 上に おいた。サインは しない まま。
「イナズマびんは わなに サインしない」
トニョは じてんしゃを ハンドルで おして、あるいて いった。だれも おいかけなかった。



ヘルメットの いろだった。はずかしくて あかい のじゃない。おこって あかい のだ。

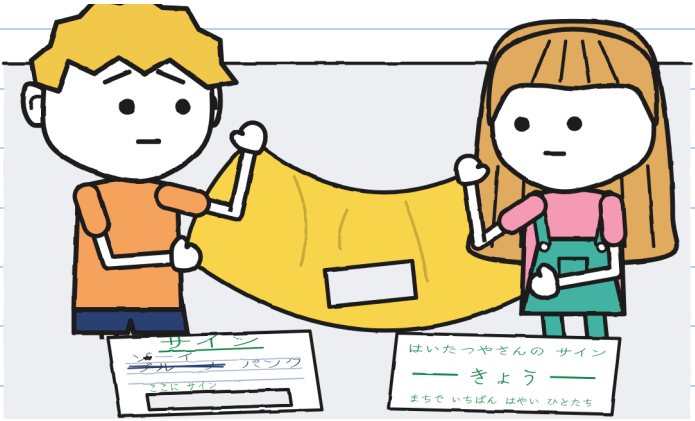
あかメーターには、その あかの ばんごうが ない。 —J.

マラさんは むらさきの ぬのを もって 出て きた。
だれが にもつを もちだしたか、きかなかった。
たなの あいた ところ、つくえ、フリータを
じゅんばんに 見た。
マラさんは 3ばんに ぬのを かけて、だきあげた。
「この にもつは とどいて いない」と ゾーイと
ブルーノに いった。「ラベルに かいて ある ことは、
トニョの もんだいだ」



ベルも ならさずに いって しまった。

ぼくは フリータが テーブルクロスと はりがみと
かみを かたづけるのを てつだった。サインが
ふたつと、あなが ひとつ。ぼくは「いった
とおりだろ」とは いわなかった。「だいじょうぶ」とも
いわなかった。だいじょうぶ じゃ なかったから。
「あなたは なにも して ない」と フリータは いった。
「しらせるのが おそかった。もっと はやく いえた。
マラさんを よべた」



フリータは 中(なか)に はいって、マラさんに ぜんぶ
ひとりで はなした。ちいさな まど、テーブルクロス、
たな、でんわ。
「トニョには、あなたが はなしなさい」と
マラさんは いった。

すいようび
水曜日、トニョは 5じ10ぷんに とおった。ブレーキを
かけなかった。5じ20ぷんに また とおった。三かいめも
とおった。フリータは みちの まんなかに かみを
もって たって いた。

おわび

きみの にもつを もちだした。
だまそうと した。
きみの ラベルを みんなに みせた。
ごめんなさい。
ーフリータ

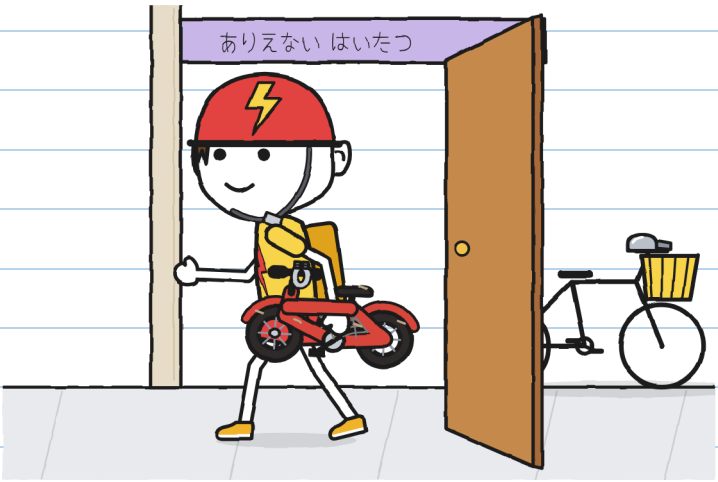
トニョは じてんしゃに のった まま かみを よんだ。
「わかった。よんだ」
「ゆるして くれる？」
「よんだ って いった」
ゆうがた　みせ
その 夕方、トニョは 店に こなかった。トニョの
はこは からっぽ だった。

なまえを ぜんぶ かいて サインした。
それくらいは しないと。 ーJ.

しょう
だい4章

ちいさな じてんしゃ

もくようび　みせ
木曜日、トニョが 店に はいって きた。みちの
みりょうがわは 見なかった。うでに じてんしゃを
かかえて いた。



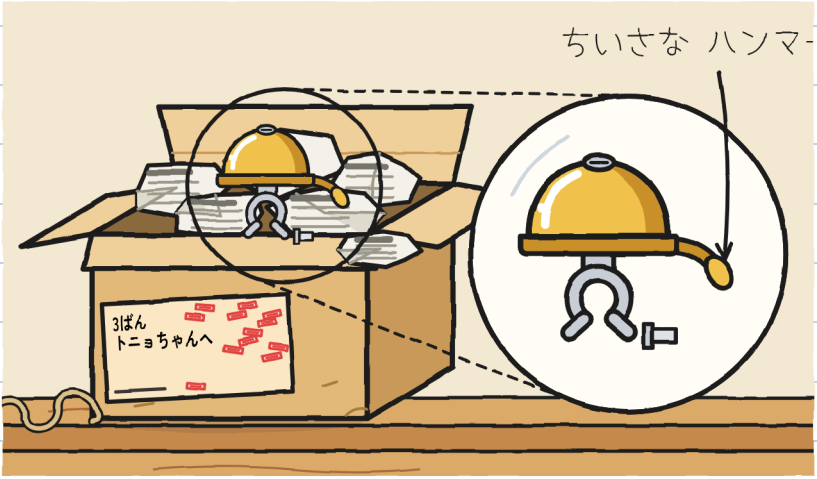
トニョの いまの じてんしゃ じゃ ない。いや、
トニョの だ。ちいさい ころの。
にちようび
「日曜日から ずっと チリーンの ことを かんがえて
いた」と トニョは いった。「あの おとを おぼえて
いる きがする。あって いるか、たしかめたい」

「3ばんを あけたい。でも ここじゃ だめだ。
みちから 見える」
マラさんは ぼくたちを 店の おくの へやに
つれて いった。
「あけるのは サインじゃ ない」と マラさんは
いった。「サインが なければ、夜明けに もどる」



「わたしも いて いい？」と フリータは きいた。
ちゃんと きいた のだ。
トニョは すこし まよった。
「さわらないなら」
「はこには さわらない。その はなしも しない」

トニョは ひもを ほどいた。中には ふるい
しんぶんしが はいって いた。ひとりでに やぶれる
ほど。そして かみの あいだに……

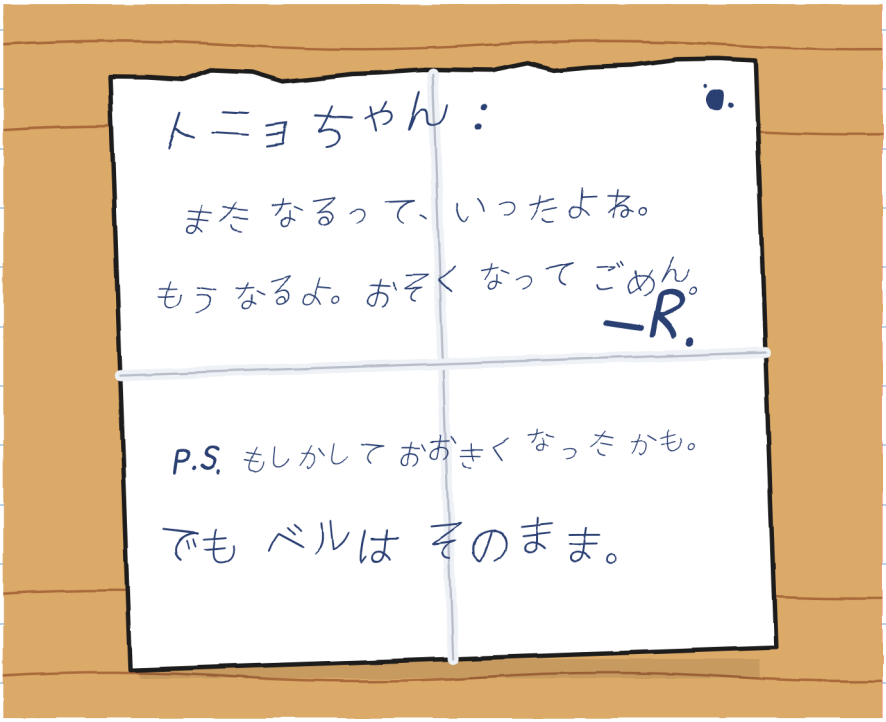


じてんしゃの ちいさな ベル。きんいろ。ばねが
ちいさな ハンマーを はずませる。ゆらすと なる。

1ばんは かみついた。2ばんは 走った。3ばんは
なる だけ。

ドラゴンも あしも ない。ベルが ひとつ。
気に 入った。 —J.

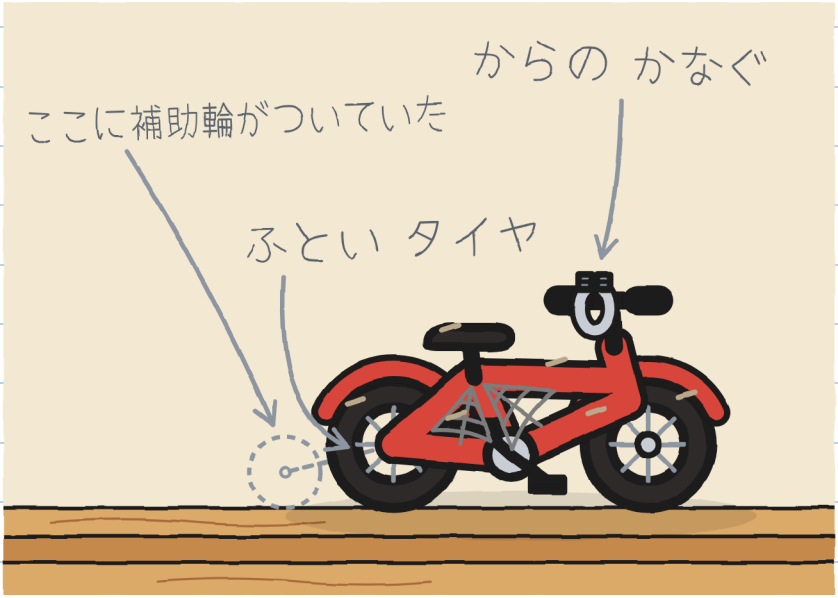
その 下(した)に、四(よっ)つに おった メモが あった。



トニョは 2(ふた)かい よんだ。
「ひどい 字(じ)だな」と いった。それから ながい あいだ だまって いた。

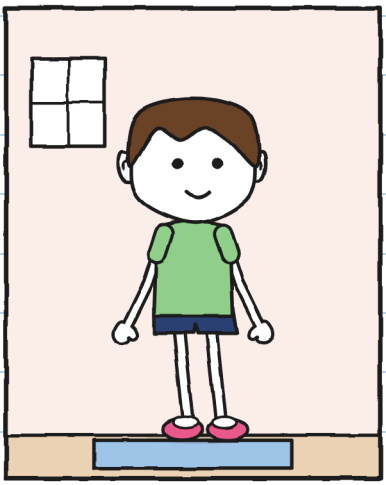
R.は やくそくを おそく まもる。フローラが いった。
どれくらい おそいかは いって ない。 —J.

それから トニョは ちいさな じてんしゃを つくえの
上に おいた。

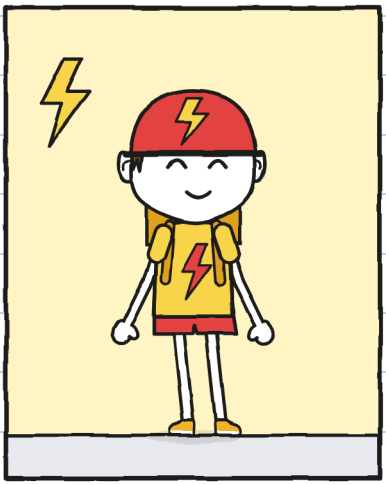


「ぼくの だった。この ベルが かなぐで ついて
いた。ある 日、ベルが ならなく なった：カチッ。
だれかが いった。『かして、トニョちゃん。なおして
かえして あげる』」
「だれが？」と フリータは つい きいて しまい、
口を おさえた。
「かおは おぼえて いない。ベルは おぼえて いる。
それと、ずいぶん まった ことも」

「うちでは トニョちゃんと よばれる」と トニョは
いった。「イナズマびんでは トニョ。さいしょの 日に
カードに かいた」
「トニョちゃんの なにが いけないの？」と
ぼくは きいた。
「なにも。ゾーイが いう まではな。イナズマびんでは
あだなは とれない。ブルーノを 見ろ」



うちでは：トニョちゃん



イナズマびんでは：トニョ

「かようびから ブルーノは ぼくを トニョちゃんと
6かい よんだ」と トニョは つけくわえた。
フリータは すみで ちいさく なった。

「まだ のれる？」と フリータが きいた。
きかずには いられなかった。
マラさんが じてんしゃを ゆかに おろした。
トニョは すわった。

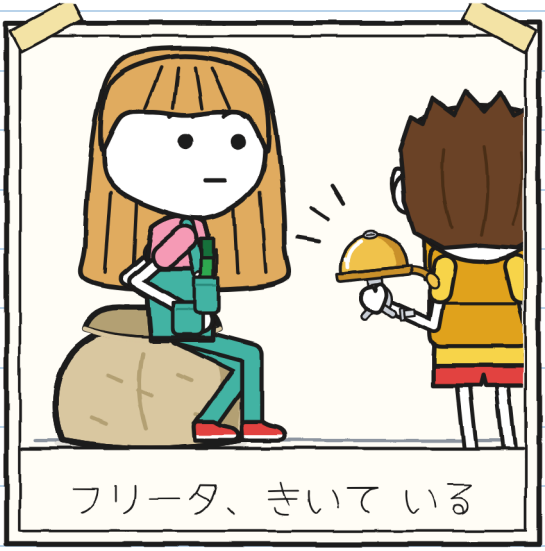


のれた。まあ、なんとか。
マラさんが ふっと おとを たてた。ほとんど わらい だった。トニョも わらった。土曜日(どようび)から トニョが わらうのを 見(み)て いなかった。

あかメーター：0。これも かぞえる から かいた。 —J.

「じてんしゃには もう イナズマびんの ベルが ある」
と ぼくは いった。「この ベルを つけなくても いい。
しまって おいても いい。それとも もどらせても」
「しってる」と トニョは いった。でも ぼくを 見た。
はじめて きいた みたいな かおだった。

フリータは ペンを しまって、11ぷん だまって
きいて いた。



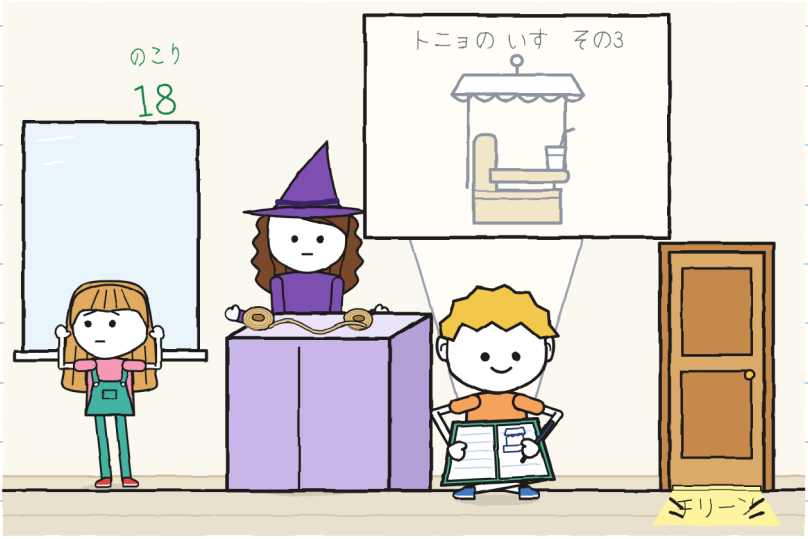


11ぷん

11ぷん。したが しびれた。 —J.

「ひとりで ためしたい」と トニョは いった。
マラさんと フリータと ぼくは 出(で)た。トニョは おくの
へやの ドアを しめた。

きかない ために、フリータは 店(みせ)の はんたいがわへ
いった。ぼくは えを かいた。トニョの いすには
もう てんがいが ある。ぬのの やねだ。それでも
きこえて しまった。



チリーン。
土曜日(どようび)と おなじ チリーン。それから もう ひとつ。
そして、ながい あいだ なにも きこえなかった。

トニョは 出て いった。かたほうの てに ベル、うでの下に はこを かかえて。

「あしたまで もって いく。サインは しない」

「夜明けに もどるよ」と マラさんは いった。

「もどれば いい。ひとばん だけ もって いたい」

「もし トニョが ベルを はこの そとに おいたら？」と ぼくは きいた。

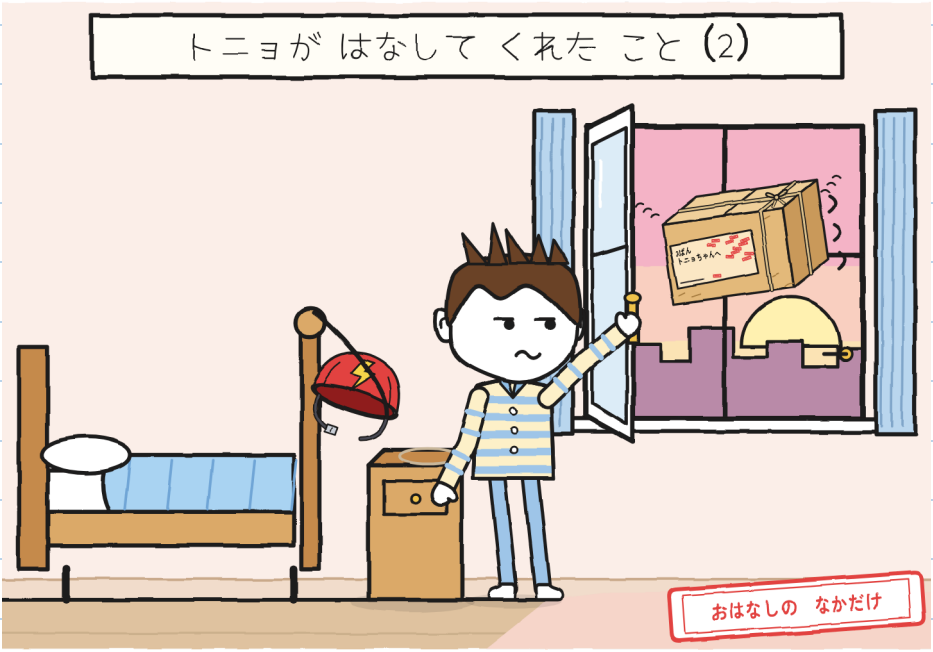
「やった ことが ない」と マラさんは いった。「あさ7じに ためす つもりも ない」

トニョは ベルと メモを はこに しまった。



あしたまで あと 14じかん。かぞえて おく。 —J.

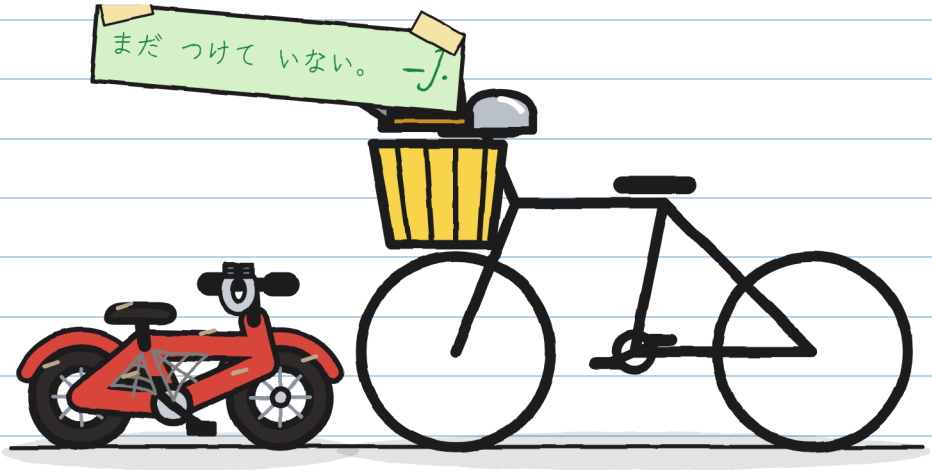
金曜日、ぼくの 通りに また おとが した：チリーン、
チリーン、チリーン。14かいめの もどり。
まえの 夜の ことは 見て いない。トニョが
はなして くれた：



「こんどは 3ばんは ぼくの ベッドの よこの だいで
ねた。マットの 上じゃ なく。夜明けに ガラスを
たたきはじめた。だから まどを あけて やった」

にもつに まどを あけて あげるなんて。ていねいだね。 —J.

ぼくは トニョの ふたつの じてんしゃを ならべて
かいた。いまの じてんしゃに ベルを かきたした。
よく にあう。
フリータは かいた ベルの 上(うえ)に かみきれを はった。



まえ　　いま

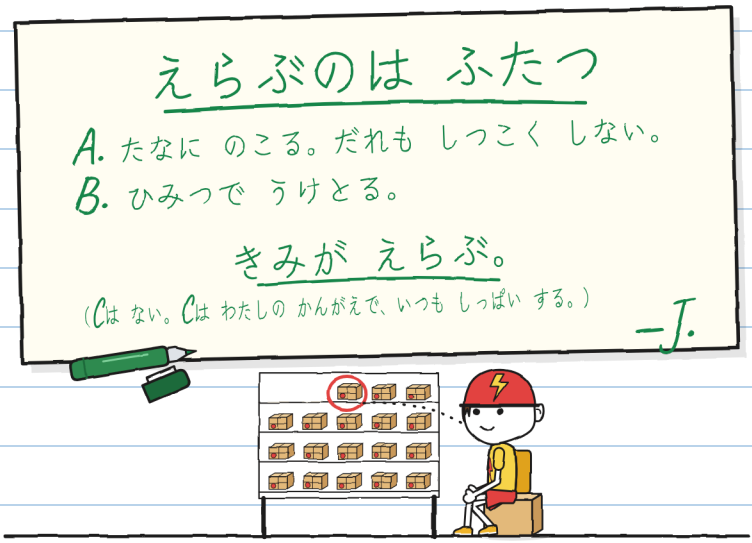
フリータの いう とおり だった。ちょっと くやしい。

だい5章

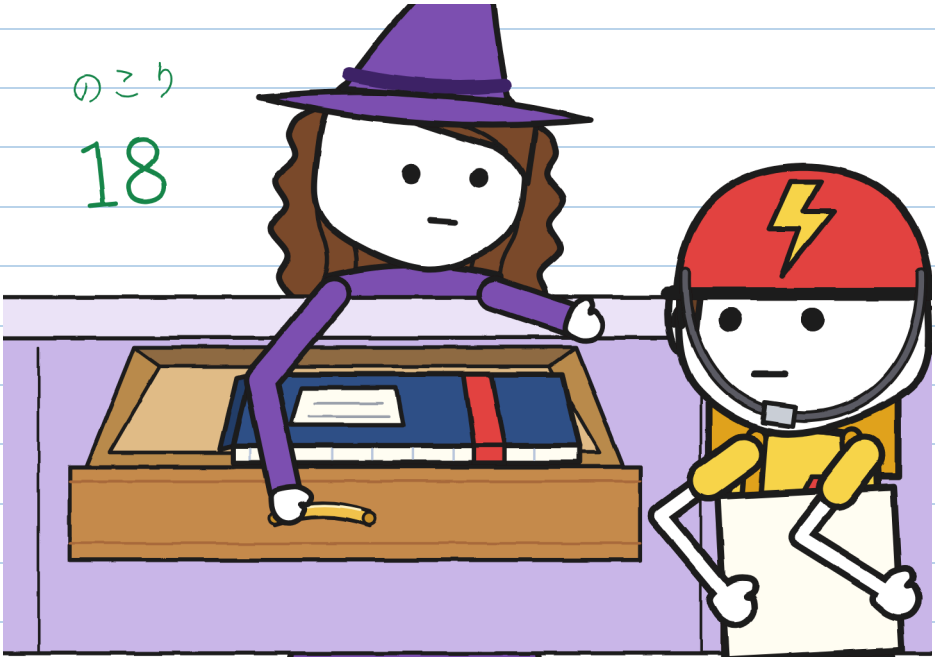
ひみつの はなし

金曜日の 夕方、3ばんは たなに あった。はんこは14こ。トニョは はこに すわって、とおくから 見て いた。

フリータは 二日まえから なにかを じゅんびして いた。こわかった。
ふたつ えらべる かみ だった。

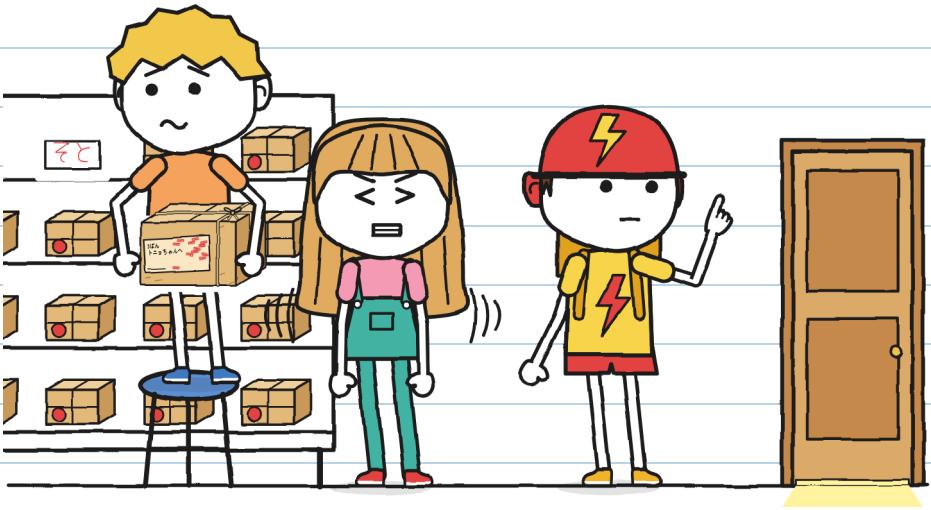


トニョは かみを よんだ。マラさんを 見(み)た。
「サインしたら、だれが しる？」
「わたし。それと わたしの きろくの ほん。はいたつを かいて ある ほんだ。ひきだしから でない」
「イナズマびんは？」
「いわない。きろくは はりがみじゃ ない」



はりがみには ばんごうだけ。なまえは ひきだしに のこる。 —J.

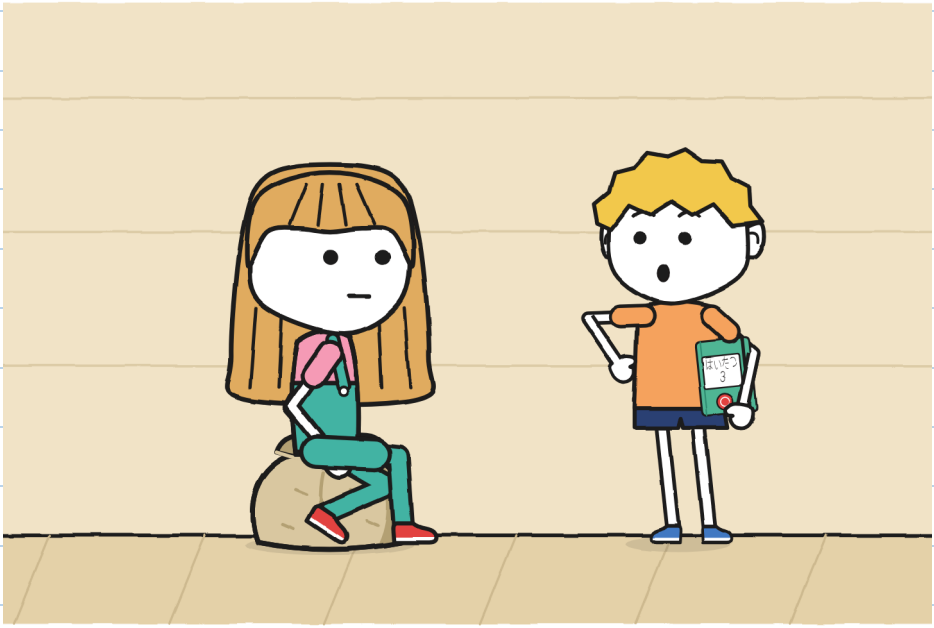
トニョは はこから たちあがった。
「Bに する」
フリータは とびはねなかった。とびはねない のを
ぼくは 見た。
「おくの へやで」と トニョは つづけた。「きみたち
ふたりが いる ところで」
「わたしも？」と フリータが きいた。
「サインを 見たいのは、だれより きみだろ。まえに
いて ほしい」



おくの へやで、トニョは また ベルと メモを だした。
ゆっくり、ていねいに 見た。
「サインする まえに、なにに サインするのか 見る」
と、だれの ほうも 見ずに いった。
フリータは Tシャツと おなじ ピンクいろに なった。



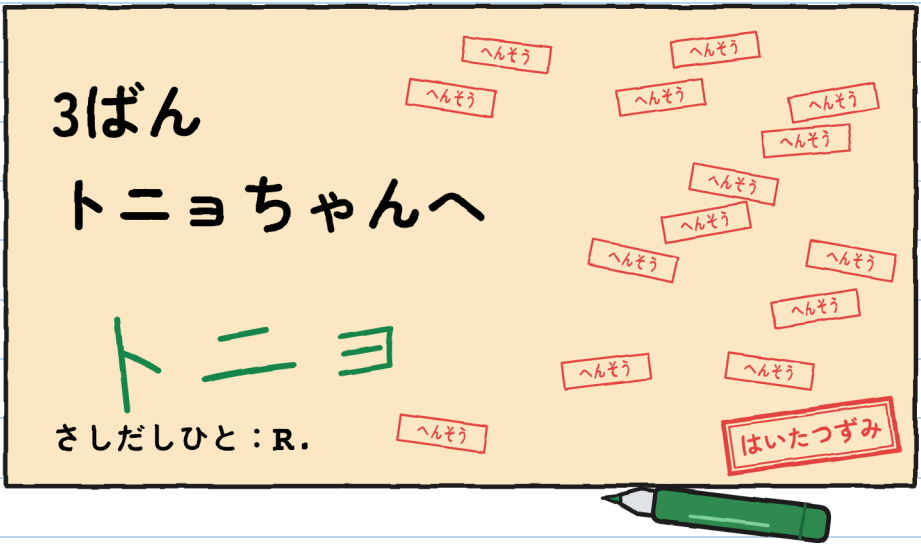
フリータは みどりの ペンを トニョに わたした。
すみの ふくろに すわった。
「なにして るの？」と ぼくは きいた。
「てを おしりの したに して すわって いるの。てを ださない ために」



ぼくは ノートを とじて、わきに かかえた。

あとで グニが ぜんぶ かきとめた。 —J.

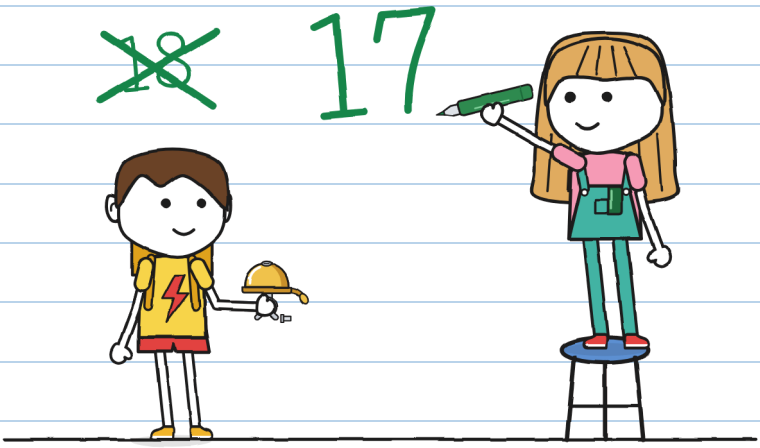
トニョは ペンの キャップを とって、サインした。



ラベルには「トニョちゃん」。サインは「トニョ」。
「これで いいの？」と トニョは きいた。「おなじ なまえじゃ ない」
「サインするのは うけとる 人(ひと)。そして うけとったのは あなた」と マラさんは いった。

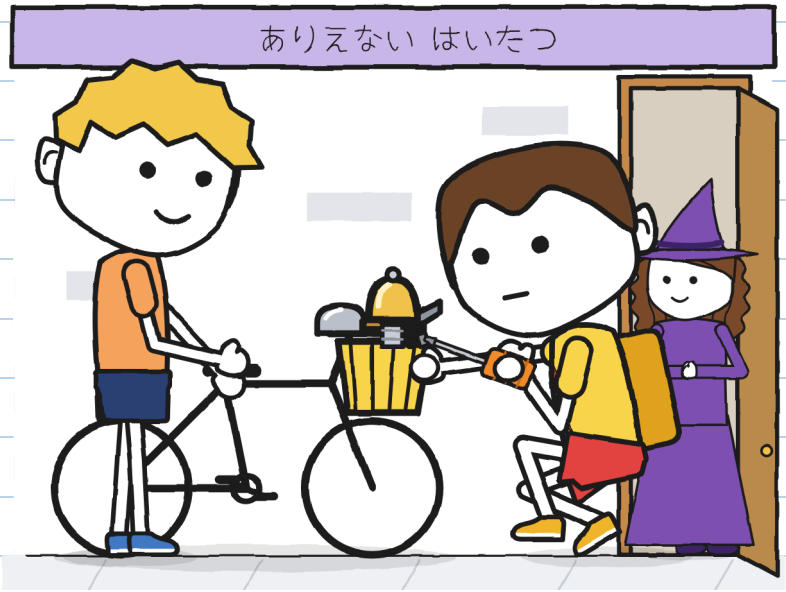
マラさんは はいたつを きろくの ほんに かいた。
フリータは もう あおい ふみだいを もって いた。
それを ゆかに おいた。
「はりがみを かえて いい？」と フリータは きいた。
マラさんじゃ なく、トニョに。
トニョは はりがみを 見た。
「すうじが ひとつ かいて ある だけだ」
「それだけ」
「いいよ」

のこり



さきに きいた よ。メモして。 —J.

みちで、トニョは じてんしゃを かべに たてかけた。
リュックから ドライバーを だした。
「ベルを つけるの？」と ぼくは きいた。
「うん」
「イナズマびんの ベルは？」
「あれは イナズマびんの。これは ぼくの」



トニョが ベルを つけた。ぼくは じてんしゃを
おさえた だけ。トニョに たのまれた から。トニョは
ゆびで ちいさな ハンマーを はじいた。
チリーン。

5じ10ぷんに イナズマびんが とおった。ブルーノが ブレーキを かけた。

「なんか なって る な？」

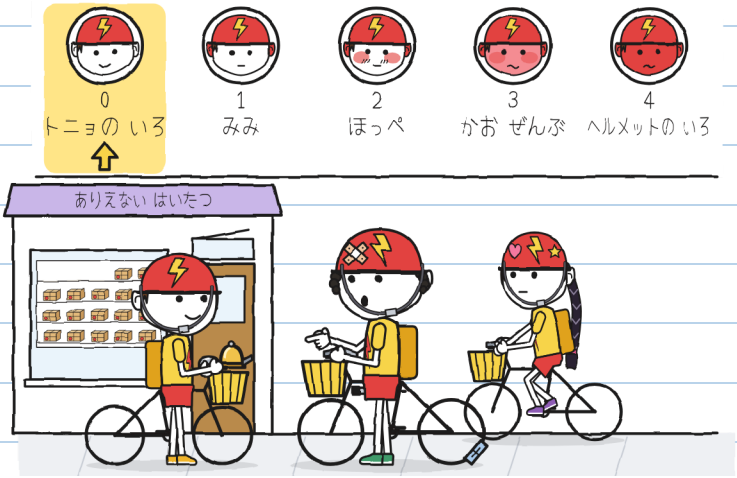
「ベルだ」

「どこの？」

「ぼくのだった」

「トニョちゃんの ころの？」

ぼくは トニョを 見た。あかく ない。みみも。

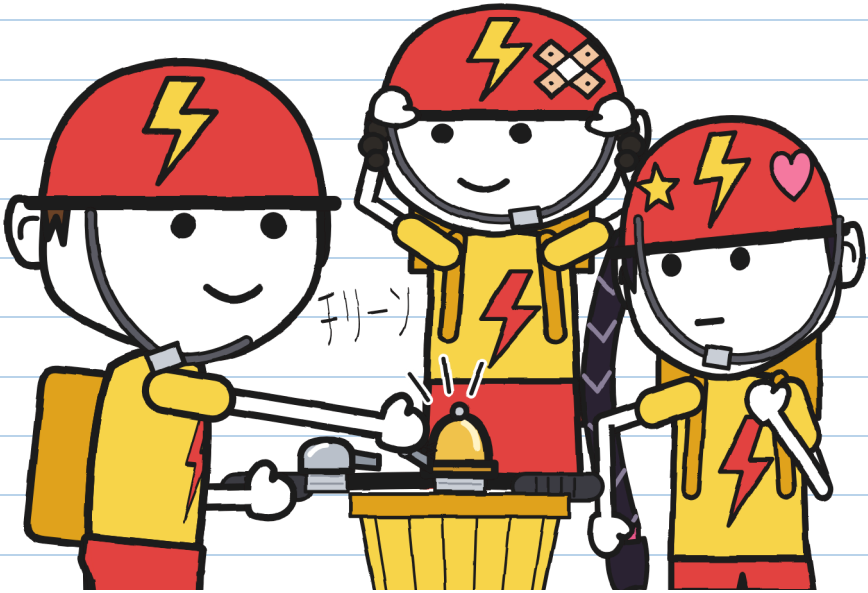


「そう よばれて いた ころの だ。いまの ぼくの なまえは トニョ。きみは なんて いう？」

「パ……」ブルーノは だまった。「ブルーノ」

「じゃあ、ブルーノだな」

ブルーノは あたまを あげた。イナズマびんでは
2ねん、だれも かれを ブルーノと よんで いなかった。
ゾーイが 口(くち)を あけた。
トニョは ちいさな ハンマーを はじいた。1かい。
チリーン。
ゾーイは 口(くち)を とじた。ちょっと かんがえた。
「いい おと」と ゾーイは いった。
「おくれるよ、トニョ」



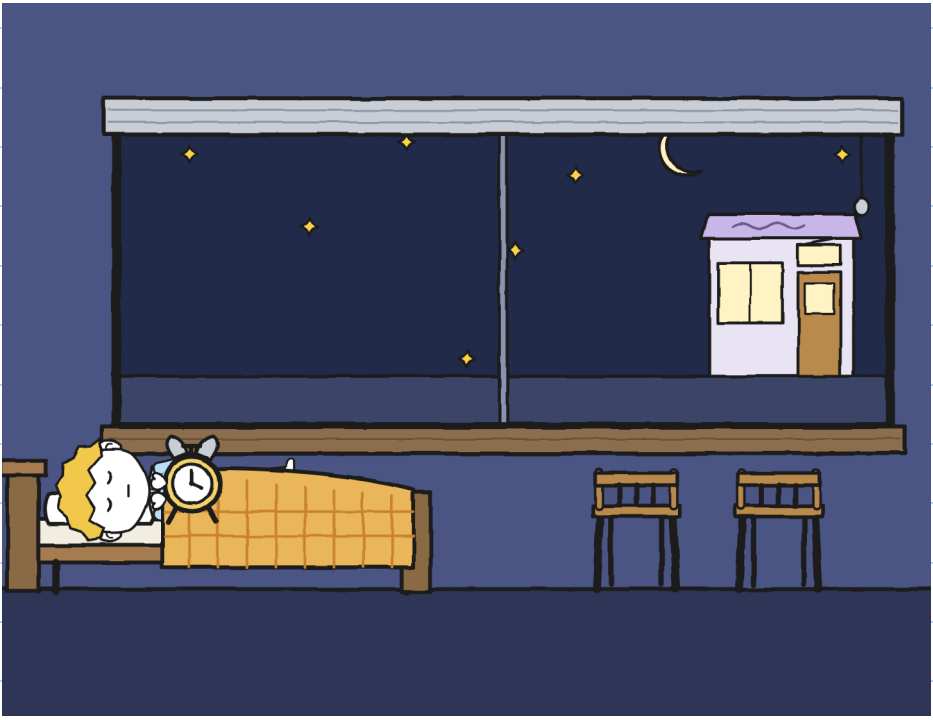
「トニョ」と いった。なにも つけたさずに。 —J.

その 夜(よる)、ぼくは また ブラインドを あげた まま に した。

「また みはり？」と お母(かあ)さんが きいた。

「きょうは なにも おこらない ことを みはって いる」

「それは わたしが とくい。さあ、ねなさい」



ペンの キャップを あけた まま ねて しまった。まくらが みどりに なった。 —J.

夜が　あけた。

なにも　ならなかった。

チリーンも、まどが　あく　おとも、4ばんの　いぬも。

ぼくの　みちで　きいた　いちばん　すてきな
しずけさ　だ。

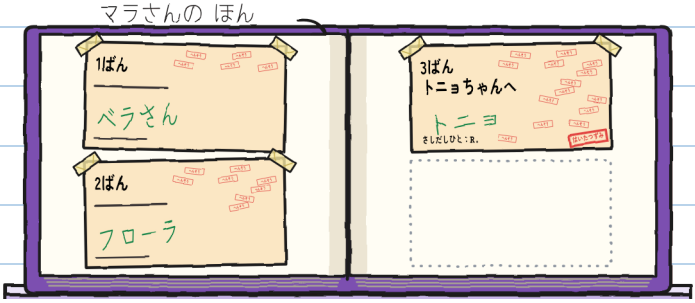


だい6章

いまのところ

土曜日の 10じに、ぼくは たなを かいた。にもつは 17こ。あいた ところが 3つ。

マラさんは ラベルを きろくの ほんに はった。ほかの ふたつと いっしょに。



たまご、たね、ベル。三つとも おくれて とどいた。三つとも とどいた。

3つめは トニョが サインした。こんどは ペンを わたした だけ。 —J.

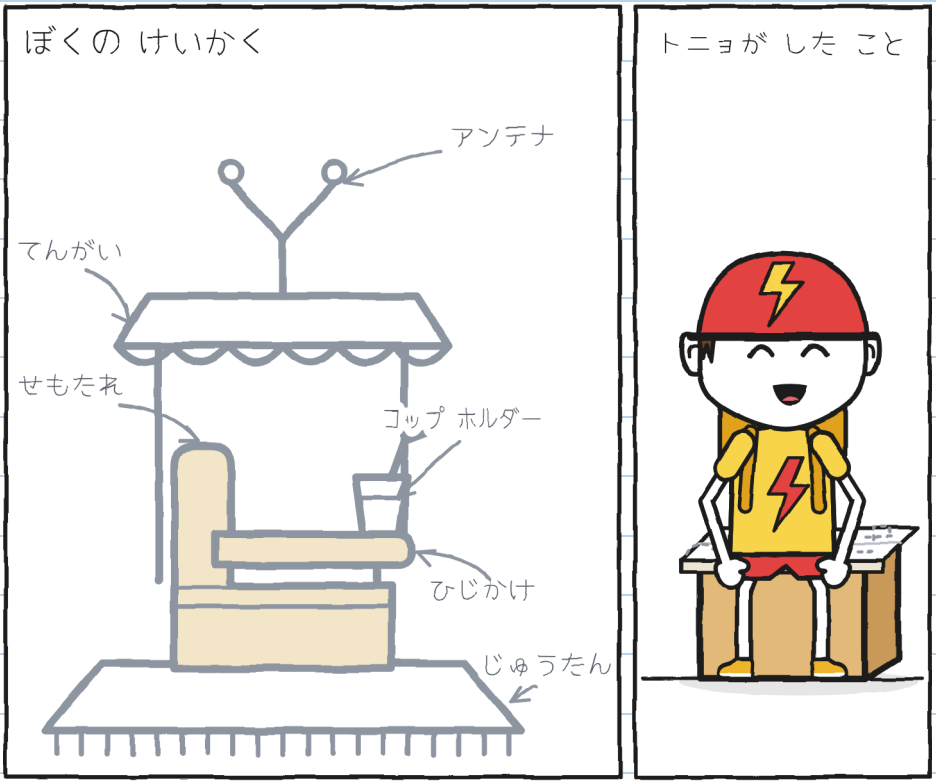
トニョは はこに すわって、もぞもぞ うごいた。
こんどは たなを 見なかった。
「ここは きみの いす、「いまのところ」ね」と
マラさんは いった。
「いまのところは これで いい」と トニョは いった。

のこり
17



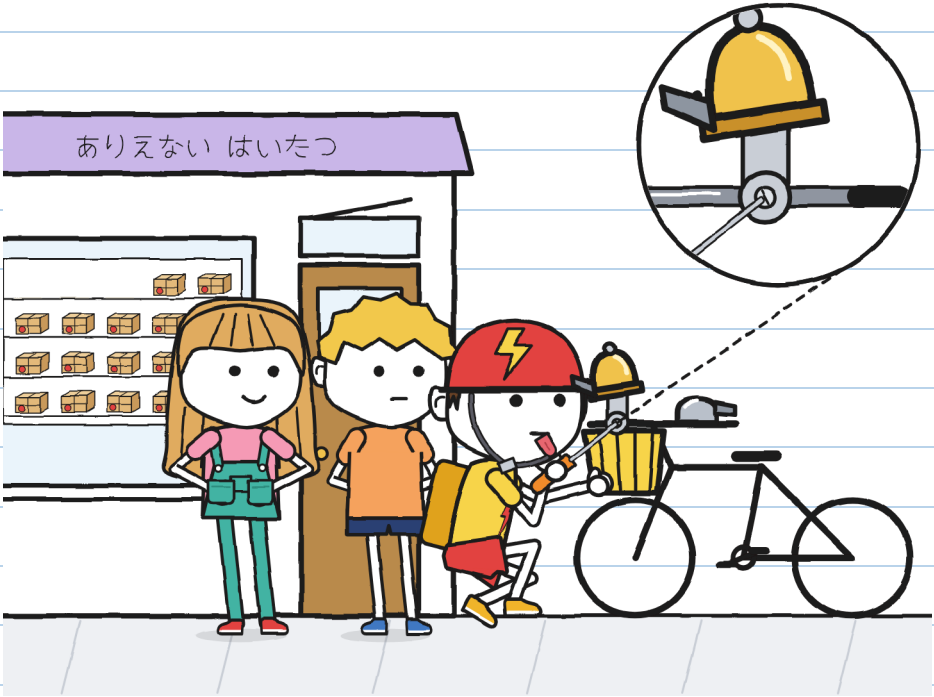
「いまのところ」は なんねんも つづく ことが ある。3ばんに きいて みて。 —J.

ぼくは トニョに けいかくを 見せた。いすの え だ。
ぜんぶで 一週間 かかった。



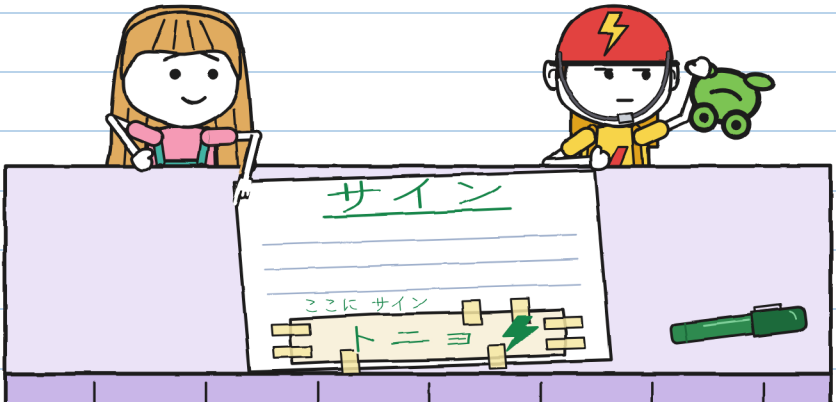
「それ、もらって いい？」
トニョは えを 四つに おった。はこの 上に おいて、
その 上に すわった。

外(そと)で、ベルが ハンドルに ななめに ついて いた。
「しめる あいだ おさえて あげる」と ぼくは いった。
「ひとりで できる」
トニョは できた。ぼくは ねじを 見(み)て いた。百(ひゃく)かい まわりそうだった。



フリータは サインの かみを だした。ちいさな まどは かみと テープで ふさいで あった。

「わなの だよ」と フリータは、マラさんが きく まえに いった。「なおした」
トニョの まえに かみを おいた。
「サインを くれる？ ほんもの。したに なにも ない から」
トニョは かみの したを 見(み)た。カウンターの したも 見(み)た。カエルを ひっくりかえした。
「いいよ」



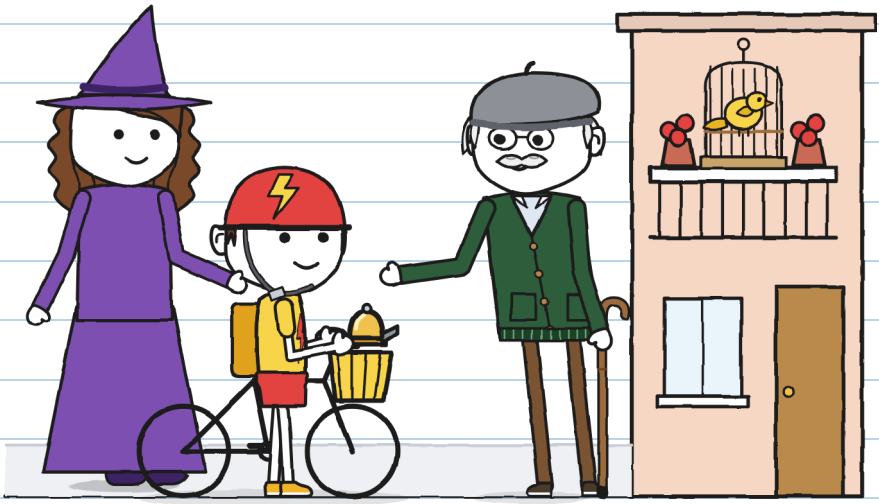
とうぜん だよ。 -J.

お昼、トニョは はいたつに 出た。つえを ついた
ベレーぼうの おじいさんが、ゆっくり みちを
わたって いた。
トニョは ブレーキを かけて、まった。ベルを 一かい
だけ ならした。「ここに いるよ」と いう ように。
チリーン。



おじいさんは つえを あげて あいさつして、ゆっくり
あるいて いった。

「アントニオさんよ」と マラさんは いった。
「わたしの リストの 2ばんめの トニョちゃん」
「その ベルは あたらしいのかい？」と おじいさんは、
ぼくたちの みちに きて から きいた。
「ふるいです」と トニョは いった。「ぼくのでした。
トニョちゃんと よばれて いた ころの」
「わたしを そう よぶ 人は 60ねん いない。
こうかん しようか？ きみが アントニオさん、
わたしが トニョちゃん」
トニョは かんがえた。
「いまのところ、いいえ」



ぼくは R.の カードを だした。てがかりは もう 六つ あった。ぼくは ふたつ ふやした。トニョが ボールペンを かして と いった。その 下に、トニョの 字で かいた。

R.に ついて わかって いる こと

?

R.



1-6（ノート2）

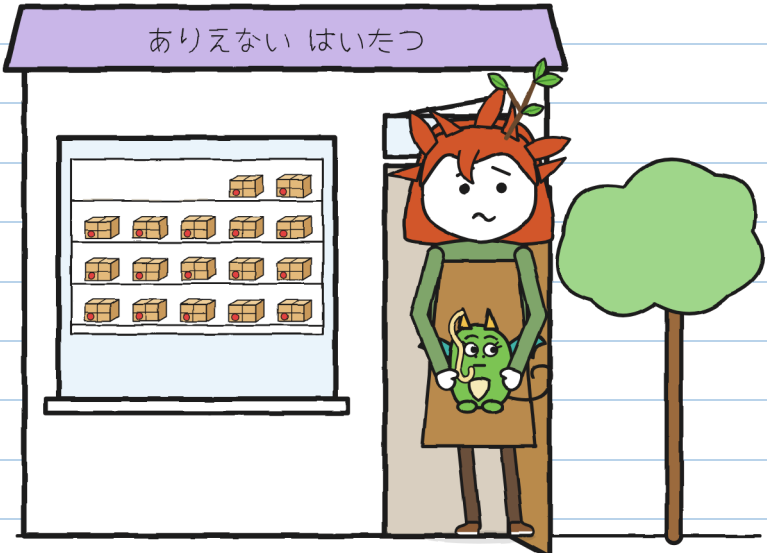
7. ちいさな じてんしゃの ころの トニョを しっていた。

8. なる ベルを やくそくした。なんねんも かかった。

まだ：せつめいを して もらって いない。

「おれいを いうの？」と フリータが きいた。
「おれいと もんく。りょうほう。まだ R.が だれか わからない けど」

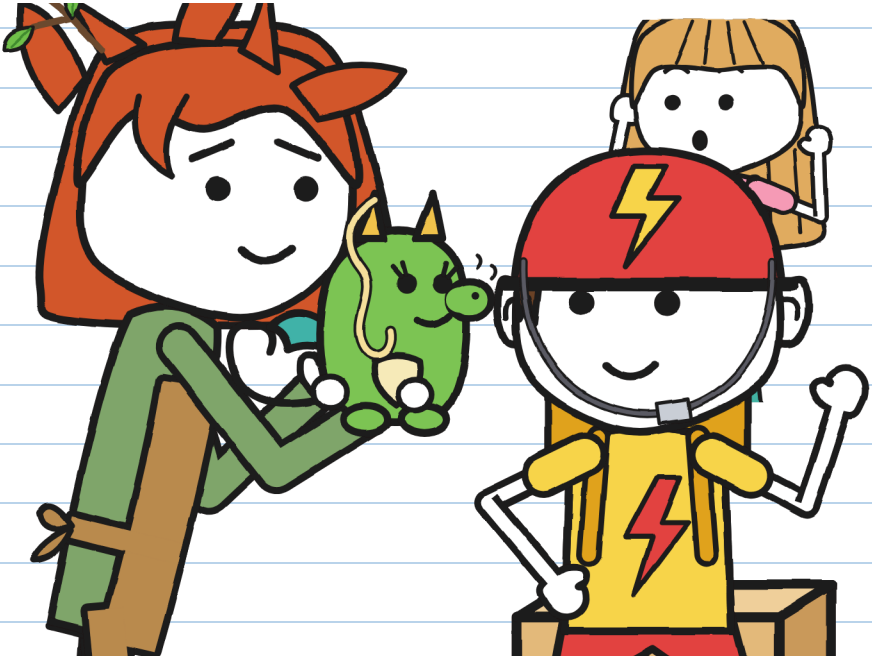
1じに ベラさんが はいって きた。パンくずを だいて、かみに ちいさな えだを つけて いた。
「たすけて ほしいの。パンくずは もう とんで いける。おりる ための あんぜんな ばしょが いる」
ベラさんは すこし だまった。「きのうは わたしの スープを えらんだの」



パンくずは ぼくを 見(み)て、ぼくの「ぼくじゃ ない」の かおを した。

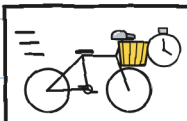
あなたの かお、そっくり。めんも ついて いる。 —J.

「はやい 人が ひつよう？」と トニョは はこの
上から きいた。
「てつだうには、まてる 人じゃ ないと」と
ベラさんは いった。
「ぼくも まてる。こんしゅうから」



わたしも まてる。もう いい？ —J.

3ばんの はいたつ。それぞれ かかった じかん：

	イナズマびん：10ぷん。
	R.：なんねんも。
	トニョ：むいか。
	フリータ、きいて いる：11ぷん（さいこう きろく）。

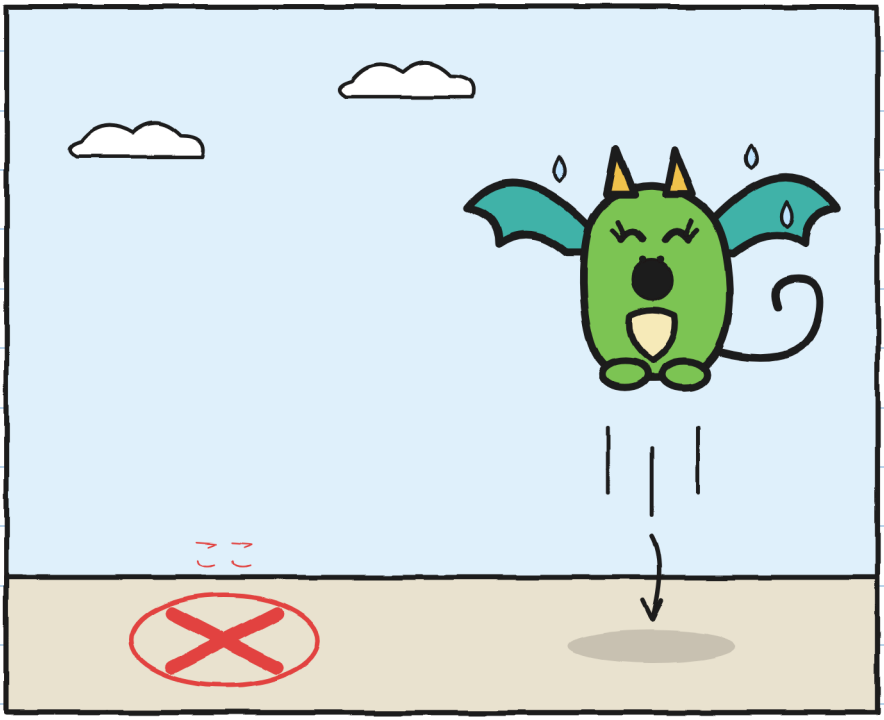


トニョは はいたつに 出た。みちで チリーンと
なった。もう ひとつ。
こんどは トニョが ベルを ならして いた。

わたしは まだ ひとりで なって いる。
れんしゅう ちゅう。 —J.

ありえない はいたつ ・4

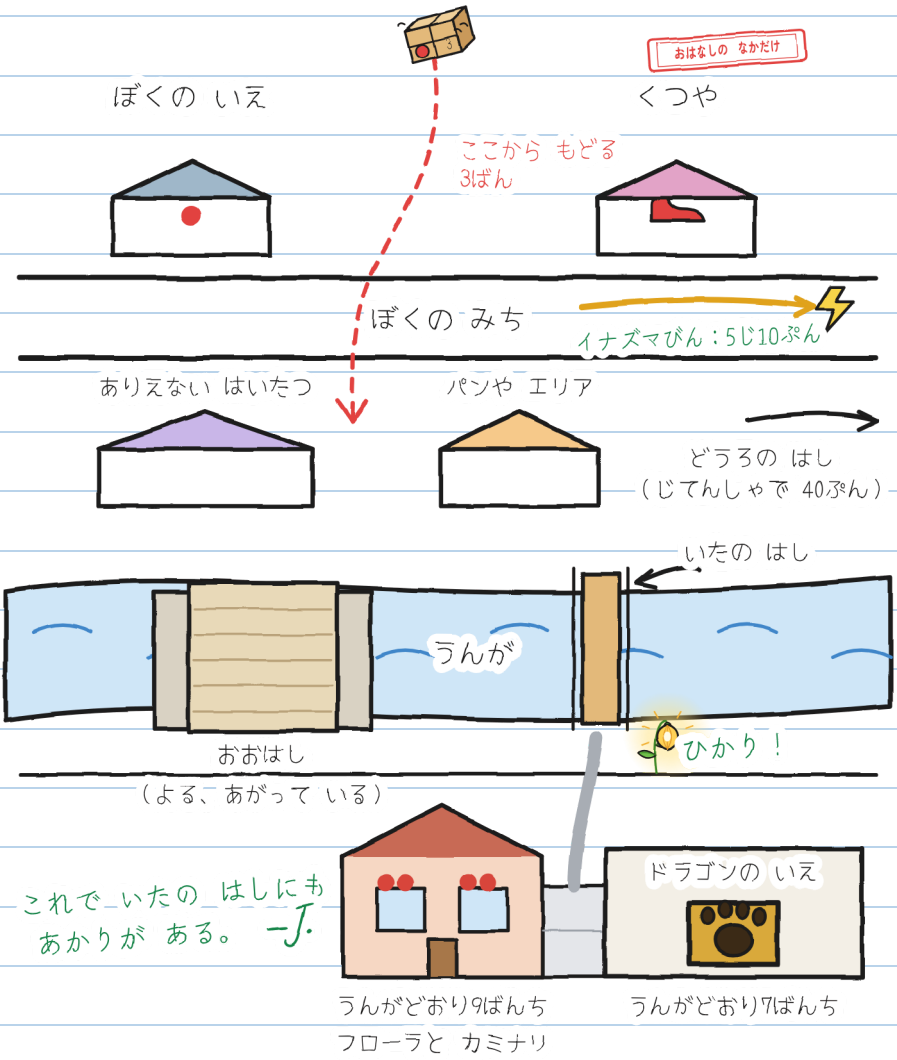
（もうすぐ）



あなたの まねを する ドラゴンの 子(こ)は、

どこに おりる？ ーJ.

まちの ちず　その3


おはなしの なかだけ
ぼくの いえ
くつや
ここから もどる
3ばん
ぼくの みち
イナズマびん：5じ10ぷん
ありえない はいたつ
パンや エリア
どうろの はし
（じてんしゃで 40ぷん）
いたの はし
うんが
おおはし
（よる、あがって いる）
ひかり！
これで いたの はしにも
あかりが ある。 -J.
ドラゴンの いえ
うんがどおり9ばんち
フローラと カミナリ
うんがどおり7ばんち

きみは なんて よばれる？

トニョは トニョちゃんと よばれて いた。いまは
じぶんで なまえを えらぶ。きみは？

こう よばれるのが すき……

こうも よんで いい……

こうは よばれたく ない……

わたしは フリータ。「J.」は サインする ときだけ。 —J.

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは 六つ あって、3さいから 16さいまで。ことばは 20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**は ページも 絵も おなじ。**XL**は しょうせつ。ちがうのは 話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
マラさんと トニョが わらう。 あかい じてんしゃが みえる？

サイズ XS · A1
マラさんは わらいそうに なった。トニョも わらった。どようびから ずっと わらって いなかった。

サイズ S · A2
マラさんが ふっと おとを たてた。ほとんど わらいだった。トニョも わらった。土曜日から トニョが わらうのを 見て いなかった。

サイズ M · B1
マラさんが音をたてた。笑い声みたいだった。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

サイズ L · B2
マラさんが、ほかの人だったら笑い声になるような音をたてた。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説 · 13+
CEFRのレベルは目安です。

どのサイズも、同じチリーン。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ
linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

本物の自転車：やること

1. ヘルメットはいつも、しっかりとめる。
   「すぐそこまで」のときも。
2. 見えるように、聞こえるように：ライト、
   明るい色の服、ベル。ベルは知らせるもの。
   命令するものではない。
3. 両手でハンドルをにぎる。
   何かに気をとられたら、安全な場所で止まる。
4. 歩道は歩く人のもの。
   そこでは自転車を押して歩く。道をわたる前は、
   止まって、見る。

「おはなしの　なかだけ」のはんこは、
おはなしでは起きても、道では起きないことにおす。

でかける　まえに、じてんしゃを　みよう

